CALS/EC実証実験の対象としていち早く工事写真をデジタル化——その切札となった「現場名人」

この4月、国土交通省直轄のすべての事業を対象に始まる電子納品は、2001年から段階的に拡大されてきた。実際には、それ以前からさまざまな現場で電子納品が試行されてきている。橋梁や水門などのメンテナンスにおけるリーディング企業・イスミックも、早い時期から電子納品に取り組んできた。そんな同社の電子納品業務において大きな役割を果たしたのが、写真管理ソフト「現場名人」だ。今回は、電子納品業務における同製品の活用法について、同社の竹元氏に話を聞いてみた。

クローズアップ「現場名人」

取材レポート：現場名人Ver.3.0（富山富士通）
ユーザー：株式会社イスミック
鉄構事業部技術一部　竹元 茂 氏

●「現場名人の操作で行き詰まったことはありません。不明の点は取扱説明書で全部解決できます」と語る竹元氏

エクセルで作った写真帳 1998年の現場デジタル化

石川島播磨重工業（IHI）のメンテナンス部門が分離独立し1987年に設立された株式会社イスミックは、橋梁や水門などの調査点検から維持補修までをトータルに行う鉄構構造物メンテナンスのリーディング企業。業務の約9割は官公庁・自治体などによる公共工事であり、フィールドは全国に広がっている。特に近年、公共事業削減の流れの中、すでにある施設を有効活用しようという傾向が強まりつつあり、同社もあらためて注目を集めている。そんな同社で主にダムの水門のメンテナンスを担当している竹元茂氏が、国土交通省の依頼で初めて電子納品を手がけたのは1998年のことだった。

●「現場名人」による工事写真管理

「その時、電子納品の実験対象となったのはある水門の点検整備業務でした。もちろん全てではなく、取りあえず工事写真のみデジタル化したいということでしたが、当時のことですからツールもなければノウハウもありません。仕方ないのでエクセルで工事写真帳を自作し、そこに写真を一枚ずつ張り付けて整理し、MOで納品しました……今では笑い話ですが、それしか方法がなかったんです」（竹元氏）。

スチール写真と同じ感覚で写真整理ができる現場名人

規模にもよるが、1つの工事現場で必要となる工事写真は約数千点。提出される工事写真帳は数十冊にも達する——それがMO一枚に納まったのだ。当然、発注者には大好評だったが、竹元氏の手間は手作業以上に大きなものとなった。

「その後もこのやり方で何度か電子納品しましたが、手間であることには変わりません。すべてが電子納品化されたら大変だなと思いながら、2年ほどして出会ったのが現場名人でした」（竹元氏）。

「現場名人」の導入を決めたのは同社の現場IT化を担う情報システムグループだ。同グループが幾つかの製品を比較し、「現場名人」を選んだのである。竹元氏は早速これを取り寄せ、自分の現場に持ち込んで使ってみることにした。

「その使い勝手の良さは、使い初めてすぐに実感できました。何しろ従来のスチール写真の整理と同じ感覚で作業でき、ごく自然な形で工事写真帳が作れるんです。実際、私など1日触っただけで基本的な操作を身につけられたほどです。もちろんお客様にも、写真が見やすく分かりやすくなったと好評でした」（竹元氏）。

CALS/ECを先取ってデジタル化のメリットを

以来、竹元氏が担当した現場では、発注元の特別な要望がないかぎり「現場名人」で工事写真の整理を行っている。効率化・省力化などの効果はきわめて大きく、いわばCALS/ECを先取るかたちでデジタル化のメリットを生み出しているようだ。

「現場名人を使うのは1日2〜3時間というところでしょうか。普段は撮ったそばからフォルダに放り込むだけですが、画像は自動で振り分けられ、後の写真整理も効率的に行えます。また、以前は現場に入る時は膨大な書類に大きなスチルカメラを抱えて大荷物だったんですが、今はノートパソコンと小さなデジカメで用が足りる。仕事がら山奥に入ることも多いので助かりますね」そう語る竹元氏は、最近、地方自治体発注の工事においてもCALS/ECに対する現場の意識が急速に高まっているのを実感するという。

「地方自治体の工事での電子納品の内容は現場ごとに違います。事前にできるだけたくさん情報を集めて、何処まで対応できるか事前協議で示せるようにしておくとよいでしょう。私も現場名人の電子納品ツールなどで、図面などの電子納品についても勉強はしています」（竹元氏）。